わが憎しみのイカロス

五木寛之

文春文庫

わが憎しみのイカロス

定価はカバーに
表示してあります

1977年8月25日　第1刷
1989年8月25日　第6刷

著　者　五木寛之

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・凸版製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710012-6

文春文庫

わが憎しみのイカロス

五木寛之

文藝春秋

目次

わが憎しみのイカロス　7
夜の角笛　69
狼の瞳の奥に　105
ブルーデイ・ブルース　159
グラスの舟　191
スタジオ番外地　229
解説　中田耕治　289

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わが憎しみのイカロス

わが憎しみのイカロス

イカロス（Ικαρος）＝父につけてもらったロウづけの翼で飛ぶうち、太陽に近づきすぎてロウが溶け海に墜ちたというギリシャ神話中の少年の名。

1

その車を見ている譲治の様子が、何だか少し変だった。霧がかかったような焦点のさだまらない目つきで、両手をだらりとさげ、放心したようにつっ立っている。投げ出されたホースから水道の水が勢いよく溢れて、たちまちあたりを水びたしにした。譲治は今まで自分が洗車中だったブルーバードのことを、すっかり忘れ果ててしまったかのように、ぼんやりとその車を眺めていた。一体、なにがおこったというのか？

「どうした、おい」

と、私は給油を終えたライトバンの燃料タンクの蓋をしめながら彼に声をかけた。

「早いとこ洗っちまって昼飯にしろ。きょうは午後から忙しくなるぞ」

譲治は返事をしなかった。まるで私の声が耳にはいらなかったような感じだった。私は少し大きな声で彼の名前を呼んだ。彼は夢からさめたように頭を動かし、目を細めて私のほうを見た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なにか言ったかい？」

と、彼は呟いた。そして驚いたように足もとの水たまりを眺め、手をのばして水道の栓をひねると再び霧のかかったような目つきでその車をみつめ続けた。

「あの車を見ろよ」

と、譲治は私を振り返らずに、ひとりごとのように呟いた。「こっちにくるぞ、あいつ——」

私は呆れて、彼が気をとられている車を眺めた。その車は、ちょうどこのスタンドの正面の位置に、右折の方向指示灯を点滅させながら道路の中央線を踏んで停止している。どうやらガソリンを補給する客らしい。それも悪くない客のようだった。ハイオク四十リッターはいけるだろう。この商売を二年もやっていると、車の面構えを見ただけでどれくらいのガスをぶち込めるか、第六感のようなものがはたらくのだ。浅ましいようだが、これも生活がかかっているのだから仕方がない。

車は外車だった。前部をややこちらへ向けて、絶え間なく続く対向車の列の切れ目を、落着いて待っている。すぐうしろに進路をふさがれた電気工事の小型トラックが、いらいらしながら続いていた。普通ならけたたましい警笛で追い立てるところだが、そのトラックは妙におとなしくその車が右折するのを待っていた。たぶん私がそのトラックのハンドルを握っていたとしても、やはり同じように遠慮がちにその車の通過するのを待ったかもしれない。車同士の間にも、人間関係と同じように、相手の貫禄に気圧されて遠慮がちになるような事はあるものなのだ。

その車は、たしかにその手の、一種の風格というか、気品というか、そういった雰囲気をあたりに漂わせて止っていた。しかし、そうは言っても、それは決して世界に一台しかないといった車でも何でもなかった。高価な車にはちがいないが、ロールス・ロイスやフェラーリといった超高級車ではない。アルファ・ロメオや、普及版のベンツよりは高いかもしれないけれども、ポルシェやジャガーよりはやや安い値段で手に入るはずだ。それはBMW（ベー・エム・ヴェー）の二〇〇〇CSという、今はもう、やや古いタイプに属する西独製のおとなしいクーペだった。おとなしい、という言い方は、ちょっと不正確かも知れない。だが、最近の国産車の馬鹿ばかしい高馬力競争やデラックス化の流れの中におくと、一九六五年から七〇年の夏頃まで製造されて今はもう製造中止になってしまっていたその車は、動力機構やその他の面で幾分控え目な印象をあたえることも確かである。

だが、車の値打ちは馬力やメカニズムの目新しさだけではなかった。その証拠が現にいま譲治をすっかり夢中にさせているこの車だろう。中身のくわしいことは知らないが、とにかく実にバランスのとれた綺麗な線をもった車だった。スタイリングだけに関していえば、国産のどの最新車種もとうていかなわないだろう。つまり美しいだけでなく、その車自体の格調というやつがどこかにじみ出ているといったたぐいのグランツーリスモなのだ。BMW（ベー・エム・ヴェー）のいくつかのクーペの中でも、私はことにこの初期の二〇〇〇CSが素敵だと思う。このタイプも、二八〇〇、三〇〇〇と年ごとに大きな排気量をもつエンジンを積み換えられると共に、ボディの各部も少しずつ変更され、今では電子噴射装置つきの堂々たるスポーティ・サルーンになってしまっている。だ

が、何でもそうだが、一番いいのはやはり最初(オリジナル)のタイプに止めをさす。それに手を加えるにつれて、次第に最初の個性が失われて行くのだ。

〈おれだってそうだ――〉

と、私はようやく右折しはじめたその車を眺めながら、ふと腹の中で苦笑した。〈このおれだって世間に出たての二十歳かそこいらの頃は、オリジナルな良さをたっぷり持っていたんじゃないのか〉

それが今はどうだ。車の面(つら)さえ見れば、どれくらい尻(ケツ)にガソリンをぶっこめるだろうと、売上げの計算ばかりが頭に浮ぶけちなスタンドの親父になりさがっている。だが、それも仕方がない。生きて行くということはそういうことなのだ。あの譲治だって、もう十年もすれば、あんな夢を見てるような目つきで洒落(しゃれ)た車を眺めたりはしなくなるだろう。

「あの車はおれが引受ける。お前はそいつを早く片づけちまってくれ」

私は給油を終えたライトバンの運転手に領収証と釣り銭を渡しながら譲治に言った。彼が洗車中の車をほったらかして、こちらへやってこようとする気配を見せたからだった。私は舌打ちして近づいてくる車を眺めた。その日は土曜日で、午後から忙しくなることがわかっていたのだ。

土曜日は、トラックや営業用のライトバンなどが少なくなり、自家用乗用車の給油や、点検の客が多い。日曜の家族ドライヴや遠出のために、どの車もしこたまガソリンをつめこんで帰って行くのである。

天気予報では、あすの日曜はめずらしく晴れることになっていた。今年は夏の終り頃から無闇と雨が多く、十月に入ってもまだ天候はすっきりしなかった。このガソリン・スタンドに立ち寄る車は、どれも薄汚れて、ボディの艶も失せ、電気系統のトラブルが馬鹿に多かった。

こういった天候は、私たちの商売にとっては、決して有難いものではない。雨が続いて常連のオーナー・ドライバーたちが車を使う機会が少なくなると、目に見えて売上げがへったし、また先月に思いきってすえつけた高速自動洗車機の利用客もあまりなかった。綺麗に洗ってもどうせまたすぐ雨と泥で汚れると諦めて、放りっぱなしの客が多いのだ。

この分で行くと、今年の暮はかなりきびしい年末になりそうだった。私が客を旨く言いくるめて食って行く中古車セールスの仕事に嫌気がさして、家と土地を担保に入れ、思いきってガソリン・スタンドの経営に踏み切ってから、ようやく二年ほどたっている。最初の年はまあまあだったが、今年に入ってからはどうも調子が悪かった。人手が足らないのも悩みの種だったし、銀行との折衝が苦手だったり、不渡り手形を掴まされたりもして、ろくなことはなかった。それに最近の若い連中ときたら、ちょっと怒鳴ったりするとさっさと翌日から来なくなるのだからやり切れない。あの譲治がいてくれなかったら、たちまちお手あげだっただろう。

「いらっしゃい」

さっきまで乗用車のオイル交換をやっていた従業員の島田が、タオルで手を拭きながら大声でどなった。道路を横切ったBMWは、静かに私たちの前に近づいてきた。そして器用にバックし

て尻を給油塔の横につけると、溜め息を吐くような音を残してエンジンを切った。
「ハイオクはこっち！」
島田は景気よく叫び、ドアを開けて降りてくる車の持主に職業的な愛想笑いをしてみせた。
「満タンですね？」
降りてきた客が軽くうなずいた。
「ああ。三十五リッター位かな」
「はい、毎度あり――」
島田は三月ほど前から使っている男だったが、かなり調子のいい若者である。仕事ぶりに陰日なたがあるので私は好きではなかった。だが、商売上こういうタイプの男も必要なのだ。私や譲治みたいに口下手な人間ばかりでは、客は機嫌を悪くして二度とこなくなってしまうだろう。
「いい車ですねえ。英国製ですか？」
島田はホースを車の尻に逆さに突っ込んだまま、媚びるようにたずねた。私は黙って車の持主に目礼し、タオルを固くしぼって車のフロント・グラスを拭きはじめた。横目で給油器の目盛りが素早く回り続けるのを眺めて、四十リッターはいけるな、と、頭の中で計算した。
「お客さん、うちのスタンドははじめてでしょう？」
島田がきいた。「この近くにおすまいなんですか」
「うん」

車の持主はポケットから煙草の袋を引っぱり出し、一本抜いて唇の端にくわえた。
「あの、すみませんけど」
と、私は会釈して客に言った。「そこで煙草はちょっとご遠慮ねがえませんか」
「わかってるんだ」
彼は私のほうをちらと眺めて、煙草をくわえたまま低い声で言った。彼はマッチを取り出そうとはしなかった。ただ、唇の端に火のついてない煙草をくわえ、腕組みして車の横に立っているだけだった。
「くせなんだよ。吸わなくても、くわえてるだけで落着くんでね」
「あいすみません」
私は舌で押し出すように慣れない言葉を口にした。
「念のためにオイルと水を見ておきましょうか」
客は黙っていた。うん、とも、いや、とも言わなかった。じっと私をみつめただけだった。
「はい」
私はさっさとダッシュボードの下のレバーを押してボンネットをあけた。ラジエーターのキャップをひねると、トルコ石のような青いどろりとした不凍液が見えた。
「オーバーヒート気味にはなりませんか。少し不凍液が濃すぎるようですね」
私はしかつめらしく車の持主にたずねた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com